

子どもが地域の良さに気づく教育プログラムの開発

地域と文化チーム

王 齊賢, 胡 キキ, 西森 愛, 劉 陽

地域に住んでいる人たち自身がその地域の魅力に気づいていないのではないかという問題意識から参加者が地域の良さに気づく、知る、自分の地域のことが好きになる、地域文化を伝える担い手になってほしいと考え、子どもが地域の良さに気づくことができるワークショップを実施した。具体的には岡山県南の玉野市に注目し、人口の減少、地域の人が玉野に対する愛着が薄い、産業転換等の諸問題に対して、歴史や文化などの貴重な財産を次の世代に手渡すために親子ともに参加可能な「玉野のことをもっと知るプロジェクト」を実施した。玉野市の過去から現在、未来まで関連を付けて考えながら進めるように活動を設定した。ワークショップの結果、体験活動を取り入れることの有効性やこのようなワークショップの実施によって地域への親しみを持つことができる可能性を示すことができた。その一方で、広報活動や活動の内容については課題が残る。今後の活動としては、高等学校で実施できる教科横断型、学際的な地域学習活動を考え、実践を行いたい。

Keywords : 地域活性化, 地域学習, まちづくり, 地域と文化, 歴史, 親子

1. 研究の背景と目的

人口減少と少子高齢化が急速に進展している現在の日本において地方都市は、既存の地域資源に目を向けその利活用を推進することで、地域の魅力づくりにつなげていく取り組みを行っている。

しかし、その地域社会においては都市化の進行、過疎化の進行や地域社会の連帯感の希薄化などから、地縁的な地域社会の教育力は低下する傾向にあると考えられる。内閣府の「子供・若者の意識に関する調査(令和元年度)」¹⁾では、地域の人たちと強いつながりを感じているかという質問項目に対して、最も割合が高いのが「そう思わない」(53.8%)、次いで「どちらかといえばそう思わない」(24.9%)という回答状況である。この結果より、8割以上の子どもが地域の人とのつながりを持ちづらくなっているということができる。

岡山県の公立学校では「令和3年度 全国学力・学習状況調査 報告書【質問紙調査】」²⁾によると、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という質問項目に対して、「当てはまる」と回答した小学生が30.7%、中学生が18.0%となっている。また、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか」という質問項目に対しては、「当てはまる」と回答した小学生が18.0%、中学生が14.2%となっている。どちらの質問項目も全国回答率と同等、もしくはやや高い程度で、決して高い割合ではない。

地域へのつながり、関心は子どもだけではなく、

その保護者にも同様に言うことができる。上記の地域の人とのつながりの持ちづらさは、保護者自身が引越してきた場合も多く、親も子ども時代からその地域に親しむことがなかったためだと思われる。そのため、保護者も住んでいる地域のことをよく理解していない可能性があると考えられる。

本研究の目的は、小学生やその保護者を対象にした、地域のことを知り、体験するプロジェクトを実施することで、両者の地域への関心を高めることである。ただ地域の歴史の知識の習得のみに重点を置くのではなく、地域の歴史の知識を習得した上で体験活動を行うこと、そして岡山県内の地域をフィールドに子どもを主体としながら保護者も含めて参加できることの2点を中心にプロジェクトを開発する。

2. 内容

本プロジェクトは子どもに生活の中で気付かない地域の魅力を発見し、地域のことを好きになってほしいという考えから、知識だけではなく、体験を重視したワークショップを実施した。

ワークショップの実施の場所について、岡山県は多くの場所でそれぞれが豊かな文化を持っている。その中でも玉野市は、今まで多くの文化活動をしていたり、タマフェスという大きなイベントを開催したりしている。さらに、玉野市は、比較的最近に、劇的に土地の価値が変化した土地であり、その変化を基に文化を作ろうとしている人たちがいる。これ

らの理由から玉野市でワークショップを実施することにした。

ワークショップは玉野市の過去から現在、未来まで関連を付けて考えながら進めるようにし、その内容は以下の3つのパートに分けた。

2-1 歴史講義

はじめに、玉野市に関する既存の知識量にかかわらず参加者に対して、玉野市の歴史を説明する。玉野市は、昭和15年8月3日に宇野町と日比町が合併し、岡山県内で4番目の市として誕生した。その後、山田村、荘内村、八浜町、東兎町を編入合併し、現在に至っている。気候から製塩業が盛んになり、1909年に宇野港が開港されて以降は、造船業の街、海の玄関口として知られている。

上記のような玉野市誕生の経緯や岡山県と玉野市の関係等を学ぶことで、参加者に玉野市について多様な視点を持ってもらう。(図1)

その後、参加者たちは大判サイズの地図を見ながら、玉野市の地理的変遷と玉野市を支えた宇野港、製塩、造船の話聞く。今ある道路がかつて1本しかなかった時代から、海に面していることから製塩業と造船業が発展し、現在の玉野市が徐々にできてくるまでの変化は、全て地図上で確認できる。そのため、参加者たちは、目の前にある地図を実際に観て触ってみながら、玉野市や宇野について理解することができる。



図1 歴史講義の様子

2-2 街歩き

パート1で講義を聞いたり、地図を見たりした上で、実際に行って見ることによって、その理解は深くなるという考えから、パート2は「街歩き」を実施した。宇野地区を舞台に、決められたスポットを設定された問題を解きながら回ってくるという活動である。(図2)

街歩きの場所の選択について、歴史講義と同じように歴史を過去から未来の順番で考え、玉野市内で

3つの場所を選んだ。1つ目は宇野八幡宮を選択し、この場所からは玉野市の歴史を知ることができる。2つ目は宇野港で、宇野駅や船に関することから玉野市の産業について学ぶことができる。特に駅の近くの産業振興ビルでは宇野港と宇野駅の展示があり、普段気付かないことを学習できる。3つ目は、133年の歴史を持ち、商店街を代表する山田快進堂というお店である。これら3つの場所は文化、経済、産業、生活というそれぞれの面から玉野市の変遷を捉えることができる。

街歩きに出発する前、参加者たちにワークシートと簡単な地図を配る。ワークシートには、3つの場所それぞれに関する歴史的な問いとヒントを設定している。そして、参加者たちは簡単な地図を手がかりに3つの場所へ行き、問いを解いていく。



図2 街歩きの様子

2-3 創作活動

歴史講義を聞き、実際に3つの場所を回ってきた後、参加者たちは玉野市・宇野について一定の認識を持つことができると考える。そして、今日のワークショップを通して生まれた感情や得た知識の定着化を図るため、塗り絵という創作活動で表現することを3つ目の活動とした。(図3)

写真は、私たちの生活や歴史を記録する現代的なツールとして多く用いられる。そのため、歴史を顧みる時や過去の様子を調査する時、写真は重要なツールである。そのようなツールである白黒写真から輪郭だけを描いた3種類の絵を用意した。白黒写真を選んだ理由は、現代において一般的に白黒写真は普段見ることができず、昔の技術として認識されている。その時代の白黒写真であれば、玉野市の昔の様子を映していると考え選択した。また、当時の

撮影技術により白黒写真という色が限定されていたものの、実際の景観は白黒ではなく、色鮮やかに彩られているのである。

その過去の様子を「再現する」ために、塗り絵の形で、参加者たちが自分の感想や気持ちを表現してもらおう。また、塗り絵で参加者の創造性を活かしたいと期待する。描き終わった後に、参加者たちになぜこの写真を選んだのか、なぜこのように色を塗ったのかといった自分の考えや感想をシェアしてもらった。



図3 塗り絵の様子

ワークショップの最後に参加者アンケートを実施した。

3. 考察

地域における文化を深く感じ、それらを効果的に活用できるのは地元の住民であることから、住民こそが主役である。その地域の魅力に気づき、地域のことが好きになり、地域文化を伝える担い手になってほしいと考えている。それらを踏まえた上で、地域に住んでいる人自身がその地域の魅力に気づいたり、理解を深めたりできるワークショップを実施した。

本プロジェクトにおいて成果が2点ある。

1点目の成果として、実際に街を歩くという活動は有効であるということが明らかになったことである。イベント終了後のアンケートでは、「街歩きという活動は面白いし、意義もある」という意見が挙げられた。さらに私たちが行ったワークショップによって参加者が継続的に地域に興味・関心を持ち続けているか明らかにするために、イベント終了から約一ヶ月後に行ったインタビューより、街歩きが一番印象に残った活動であることが分かった。これらことから、ただ講義を聞いて地域のことについて知るだけではなく、街歩きという体験を取り入れることによって、講義での知識との関連や理解をより

深めることができた。

2点目の成果として、このような活動によって、地域に対する親しみを持つことができる可能性があるということである。実施後一ヶ月後のインタビューでは、このワークショップに参加していた前後では関心の度合いが異なるという意見もあった。

以上のことから、地域に埋もれた歴史的な建造物や町並み、景観から地域の変遷に気が付く活動は、活動自体の価値だけでなく、住民の地域への誇りや愛着を深め、地域社会の連帯感を強めることができると考える。

その一方で、課題も2点挙げられる。

1点目に広報活動である。ワークショップ当日は、本来焦点を当てていた小学生とその保護者の参加はなく、地元の高校教師1名と留学生2名の参加のみであった。チラシやホームページの作成など自分たちでできることは行ったもの思うように参加者を集めることはできず、広報活動の重要性を実感した。

2点目に、町歩きの場所の選定である。アンケートより、「距離が遠く大変だった」「場所を絞って深く調べた方がいいのではないか」という意見がみられた。歴史講義との関連や宇野を象徴する場所にすることばかり考えてしまい、結果的に距離の問題、歴史や文化という分野に偏った場所の選定となった。また、場所と場所の間を参加者が飽きないようにする工夫が必要だったと考える。

4. 展望

今後の活動について、以下の3点を中心に行う予定である。

まず、最初に設定していた参加対象者である、小学生とその保護者が参加していなかったことを踏まえた、改善策の考案である。親子が参加していなかった理由の一つとして、広報活動の不十分さが考えられる。少しでも実現に近づけるためには、各小学校にチラシを持参して呼び掛けるなどの積極的な広報活動が必要だった。もしくは、地域をフィールドにしながら学校教育の中での実践も考えられた。また、比較的行事が多い12月という開催時期は検討する余地があったと考える。

次に、様々な組織、団体との連携である。玉野市では、多くのNPO等の組織が様々な形でイベントを開催し、より良い玉野市を作ろうとしている。本プロジェクトでは、玉野市で市民活動を行っている方々と実際の玉野市の様子をお話させていただいたり、本プロジェクトに対するご助言をいただいたりした。しかし、そのつながりを本プロ

ジェクトのさらなる発展に有効活用できなかった。今後、多くの方、組織とつながっていくことで、本ワークショップの効果を波及させ、多くの地域で実施されていくことを目指したい。

最後に、今回のワークショップの実践を踏まえた、高等学校での授業実践デザインである。玉野 SDGs みらいづくりセンターが行った高校生の意識調査では、地域活動への関心度が 1, 2 年生では低く、3 年生では高くなっていった³⁾。その理由として、「高校 3 年間を通じて学び、地域に関わり、学校以外の人と接した時間が増えてきた結果であろう」⁴⁾と推察がなされている。さらに、分析によると、「生まれ育った地域での経験、体験が、地元愛を育み、地域の関心を深めていくことになり、玉野に住み続けたい理由になる」⁵⁾ことが明確となっている。このことから、生徒自身が玉野の特性、魅力点を見つけるような経験、体験を続けていくことが地域への関心や愛着を高めることにつながると考える。

このような現状に加え、高校生は将来の選択肢として、大学進学や就職等を控えており、地元に住み続けるか、地元を離れるか考えなければならない時期でもある。そのため、高校生を対象に授業実践デザインを行うこととした。

本プロジェクトに基づき、高等学校教育での実践では教科横断型、学際的な活動を考えている。具体的な内容としては、各教科の授業内容と関連づけながら玉野市に関する様々な事象を学習していく。そして、生徒は玉野市が合併する前の自治体ごとにグループを組み、その地域のある場所を選定し、隠された文化の側面や魅力点を掘り出す。最終的には、それらを表現する方法として、手作りマップの創作活動を実施する。以下の表 1 に現時点での授業案の詳細を記載する。

今回の活動内容に基づいた上記の提案を実際に高等学校で実践したいと考えている。そして、このような地域学習などの授業を出発点として、さらなる豊富な活動や体験学習の実施を期待する。

表 1 高等学校における授業案

<p>【各教科との関連】</p> <p>○製塩—化学, 地理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・化学：実際に製塩を行う。 ・地理：なぜ玉野という土地で製塩業が盛んだったのか地理的背景を踏まえながら学習する。 <p>○玉野市の民謡—音楽, 歴史</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史：民謡が生まれた経緯, 民謡に込められている思いを学んだり, 調査したりする。
--

・音楽：上記の歴史での学習を踏まえて、歌ったり、楽器で演奏したりする。

○玉野市の歴史や地形—歴史, 地理

・歴史：日本史全体における岡山県や玉野市の位置づけ, 玉野市誕生の経緯, 国際社会における産業の変遷, 交通等を学んだり, 調査したりする。

・地理：玉野市における地形の変遷, どのように身近な地域ができていったのかを学んだり, 調査したりする。

【調査】

玉野市が合併する前の自治体でグループを組み、その地域の中から場所を選定し、各種資料を用いて調査を行ったり、実際に訪れたりする。

【表現活動】

・上記の調査でみつけた魅力をクラスで一枚の大きな地図に示す。

・その地図を基に、各グループの調査を共有し合い、理解を深める。

謝辞

本プロジェクトにあたりご協力して頂きました、特定非営利活動法人みなと・まちづくり機構たまの専務理事の斉藤章夫様、玉野 SDGs みらいづくりセンター理事長の東りえ様、広報活動にご協力していただきましたショッピングモールメルカ支配人の深田征紀様、玉野市観光協会様、宇野駅ご担当者様、ご指導して下さった松多信尚先生をはじめとした岡山大学大学院教育学研究科の先生方に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 内閣府 (2020) 「子供・若者の意識に関する調査 (令和元年度)」
(<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r01/pdf-index.html>)
- 2) 国立教育政策研究所 (2021) 「令和 3 年度 全国学力・学習状況調査 報告書【質問紙調査】」
(<https://www.nier.go.jp/21chousakekkahoukoku/report/data/21qn.pdf>)
- 3) 玉野 SDGs みらいづくりセンター (2021) 『～地域課題解決支援プロジェクト～玉野 SDGs みらいづくりセンター 2020 年度活動報告書』 p.13
- 4) 同上, p.13
- 5) 同上, p.14